

町村週報

(町村の購読料は会費)
の中に含まれております

3263号

毎週月曜日発行

発行所 全国町村会 〒100-0014 東京都千代田区永田町1丁目11番35号：電話03-3581-0486 FAX03-3580-5955

発行人 横田真二：定価1部40円・年間1,500円(税、送料含む) 振替口座00110-8-4767

<https://www.zck.or.jp/>



幸を祈って奉納される「天の岩戸神楽」(写真提供 徳島県つるぎ町役場)

もくじ

随情	フ活	政活
想報	フォーラム	策動

3人の恩人………	町村ご当地キャラじまん………	この星空や自然・文化を「次世代に伝える」——星空保護区とエコツーリズム——保護しながら観光資源として活用する取組——東京都神津島村………	内閣府 地方創生推進事務局………	令和6年度政府予算編成で要請活動——決議・要望事項の実現を求める——………	官民連携のススメ「地方創生SDGs 官民連携プラットフォーム」を使いこなす人たち………
岐阜県町村会会長・八百津町長 金子 政則………	早稲田大学名誉教授 宮口 侂迪………	富山での全国過疎問題シンポジウムを 終えて			

コラム

富山での全国過疎問題シンポジウムを終えて

早稲田大学名誉教授

宮口 侂迪

10月26・27の両日、富山県で全国過疎問題シンポジウムが行われた。各県で毎年引き受けてきて34回目になる。富山での開催が比較的遅かったのは、水力発電を端緒とする工業化の進行が早くて職場に恵まれ、過疎地域が少なかったことにもよる。

筆者が最も国の政策と関わってきたのが過疎問題で、総務省の過疎問題懇談会の座長と過疎地域優良事例の表彰委員長をほぼ20年務めさせていただいた。座長は一昨年の新法制定を機に退かされたが、表彰委員長の方は、私の住む富山シンポを最後に退くことになった。富山シンポでは加えて基調講演もさせていただき、富山で大役を終えることができたことは、一際感慨深いものがある。

人口減少傾向の中で、過疎地域は減少の数にとらわれることなく、少数の人々が新しい生きかたをめざす、豊かな少数社会の構築こそ目標であるべきである。そこから都市とは異なる価値が育っていく。これは筆者の20年以上にわたる持論であるが、今年度の表彰地域の中にもその新しい方向がいくつか見えた。新潟県旧山古志村は地震で壊滅的な被害を受けた。集団で避難し、錦鯉という地場産業もあってかなりの人が戻っているが、人口は

千人に満たない。ここではローカルの価値を最大限に広げるのがデジタルという考えから、DAOと呼ばれる分散型自立組織を活用、差し替え不可能なNFTを「デジタルアート×電子住民票」として活用し、人口800人の村がNFTを接点とした世界にまたがる共同体を形成している。小さな村の未来志向として素晴らしいチャレンジだと思ふ。そして帰省と称してむらをおとすれる人の中には移住に踏み切る人も少なくないという。

徳島県つるぎ町の家賃集落は、丁寧に耕作された斜面農業で世界農業遺産の一部となっているが、この景観を守ろうと、他の地区に住む縁者がグループをつくり、耕作に通って藍栽培を復活、パウダー加工して「食べる藍」を商品化するなど、地域の価値を守り育ててこれからは移住者が現れる可能性もある。

旧山古志村のケースも家賃集落の場合も、いわば他人が地域の価値に感じ、その地域の仲間、ひいては主役になっていく動きの一端であると思う。関係人口という言葉が生まれて久しいが、常住人口が減っても、今は本場に思いがけない関係が生まれる時代である。過疎地域のその点をも含めた発展を心から祈りたい。

写真キャプション

「天の岩戸神楽(あまのいわとかぐら)」は、毎年元旦の年明けとともに、つるぎ町の松尾神社で奉納されている。天の岩戸に隠れた天照大御神が、神々の祈りと舞楽によって導き出されるまでの神話に基づく神社奉納歌舞。面をつけて舞う神楽としては県内最大級。

全国町村会

令和6年度政府予算編成で要請活動
—決議・要望事項の実現を求める—

自由民主党 森山総務会長（中央）



総理官邸 村井内閣官房副長官（中央）



自由民主党 萩生田政務調査会長（中央）



総務省 船橋総務大臣政務官（中央右）

全国町村会は、令和6年度政府予算編成を控え、11月16日に政府予算対策本部を設置するとともに、11月29日に正副会長が全国町村長大会（11月15日開催）で採択した決議・緊急決議・特別決議及び全国町村長大会要望の実現方について、総理官邸、自由民主党、総務省、国土交通省、厚生労働省、農林水産省に対し、要請活動を行った。

※決議・緊急決議・特別決議・大会要望は、町村週報3262号（12月4日付）をご参照ください。全国町村会ホームページ（<https://www.zck.or.jp/>）からもご覧いただけます。

活 動

要請活動参加者

【総理官邸・自由民主党】

吉田会長（広島県坂町長）

棚野副会長・会長代行（北海道白糠町長）

矢田副会長・会長代行（石川県津幡町長）

田島副会長・会長代行（佐賀県白石町長）

【総務省・国土交通省】

鈴木副会長（岩手県葛巻町長）

金子副会長（岐阜県八百津町長）

高岡副会長（鹿児島県徳之島町長）

【厚生労働省】

松田副会長（秋田県美郷町長）

古口副会長（栃木県茂木町長）

岡本副会長（和歌山県九度山町長）

山崎副会長（岡山県鏡野町長）

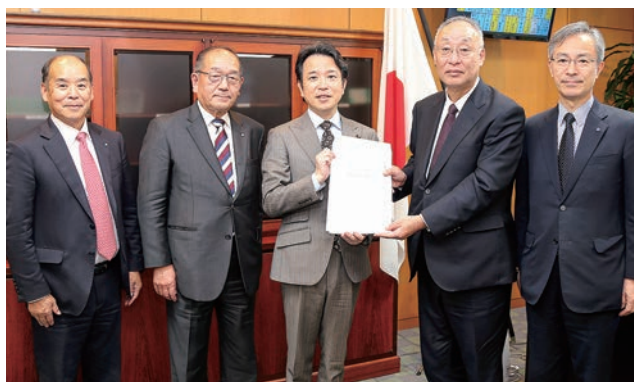
【農林水産省】

岩田副会長（千葉県東庄町長）

玉井副会長（徳島県板野町長）



国土交通省 丹羽道路局長（中央左）



厚生労働省 濱地厚生労働副大臣（中央）



農林水産省 舞立農林水産大臣政務官（中央）

町村専用ページ「町村.com」をご覧になっていますか

● <https://www.zck.or.jp/choson/> ●

「町村.com」では、全国町村会の活動状況や中央省庁等の政策情報を随時提供しています。ぜひご活用ください。

- ・「町村.com」は、町村関係者の方だけがご利用いただける専用ページです。ご覧になる際は、所定のパスワードが必要になります。
- ・ユーザー名とパスワードは、各町村にお知らせ済み（平成18年9月27日付）ですが、お問い合わせは、全国町村会広報部 (kouhou@zck.or.jp) までお願いいたします。



官民連携のススメ 「地方創生SDGs官民連携プラットフォーム」 を使いこなす人たち

内閣府 地方創生推進事務局

真夏のWEB会議室に集まる人たち

8月某日の昼下がり、とあるWEB会議室に集まる面々。参加者は全員、自治体職員だ。内閣府主催の「地方創生SDGs官民連携プラットフォーム」の使い方を学ぶセミナーでは、地域課題の解決を担う自治体職員のための講座を開催し、専用のワークシートを用いて「課題の発案」や「課題の言語化」などを実践的に学んでいる。月1回ペースで開催されるこの「課題登録支援セミナー」には、毎回数十名の自治体職員が自主的に参加している。

町村職員にこそ使って欲しい

官民連携や公民連携という言葉をよく聞くものの、実際に一般企業への対応をするのは骨が折れる業務だ。特にマルチタスクをこなす町村職員にとっては、対外対応は後回しになりがちで、有益な提案と営業メールを仕分けるだけでも相当な時間を費やしてしまう。

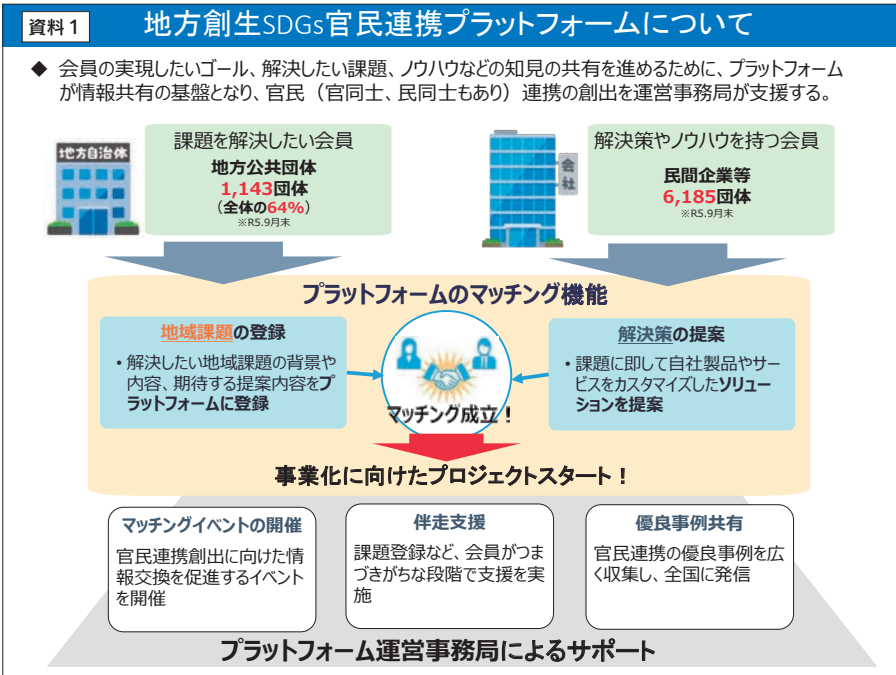
「そんな町村職員さんこそ使って欲しい」と話すのは、冒頭のWEBセミナーで講師を務める内閣府の菊地健太さん。「プラットフォーム

のマッチング機能を使えば、それぞれの地域課題に対応した企業の提案を効率良く集めることができ、提案の中から意見交換する企業を選ぶことができる」

「多様な業務をこなす町村職員だからこそ、企業とのマッチングをプラットフォームで行うことは非常に助かるはず」と話す菊地さんも自治体からの出向者、つまり、自治体職員だ。

自治体職員が作る、自治体職員のためのプラットフォーム

内閣府にある本プラットフォームの企画開発チームは、菊地さんを含む3名の自治体職員で構成されている。自治体職員の目から見て、どうすればより使いやすいかという意見がすぐに反映される体制になっている



る。つまり、自治体職員が作る、自治体職員のためのプラットフォームなのだ。その効果は如実に表れており、当プラットフォームの会員数は2018年の開設以降上昇の一途をたどり、2023年9月末時点で7345団体、名実ともに国内最大級の官民連携プラットフォームに成長している。(資料1)

政 策

資料2

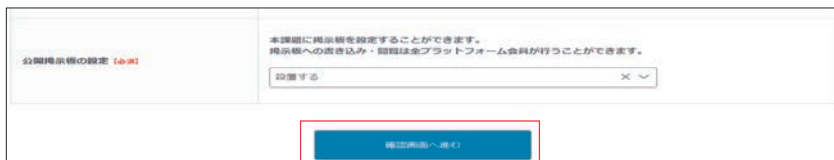
官民連携プラットフォーム利用の手順

Step1 地方創生SDGs官民連携プラットフォームのウェブサイト
(URL: https://future-city.go.jp/platform/) にアクセス

Step2 マイページにログインし「課題を登録する」から課題登録画面に進み、各項目を入力する



Step3 入力内容完了後、画面下部の「確認画面へ進む」をクリックする



Step4 登録内容確認画面下部の「登録・更新する」をクリックする

※すぐに課題登録しない場合は「一時保存」にて入力内容を保存可能
※「画面を印刷する」から入力画面の印刷も可能



Step5 民間団体からニーズに沿った提案が来たら、マイページ内提案受領画面にて「意見交換希望」を選択し、意見交換開始（マッチング成立）

まずは地域課題の登録から

本プラットフォームにおける官民マッチングの流れは、①SDGsを通じて解決したい地域課題を自治体会員が登録し、②それを見た民間企業が自社の技術やノウハウを活かし

て解決策を提案するという流れだ。その後、適切な解決策を提案した民間企業との意見交換を通じて地域課題の解決に向けた協働を開始する仕組みとなっている。これまで述べたように、本プラットフォームを活用するには、まずは課題登録から始める必要がある。「課

題の発案や記載内容のブラッシュアップ、マッチング成立後の協働に向けた伴走支援など、内閣府がサポートを行いますので、勇気を出して課題登録という第一歩を踏み出してください！」と菊地さんは全国の町村職員に呼びかけた。（資料2）

町村による官民連携事例

【事例Ⅰ】
徳島県那賀町

株式会社エイト日本技術開発
×
「木や森林の新しい機能・用途を活かした林業6次産業化事業」

豊富な森林資源を有する徳島県那賀町は「森林資源の新しい出口を創る」ためにマテリアル利用・エネルギー利用の両面から森林バイオマスの新しい利活用を目指していましたが、事業実施体制の構築が課題となっていました。

そこで、那賀町に加え、株式会社エイト日本技術開発や地元事業者等が出資して事業実施会社「株式会社那賀ウッド」を設立し、木材生産・加工・流通を一貫で行う6次産業化をすることにより、市場のニーズに素早く応え、森林資源を循環利用できるように取組を推進しています。

例えば、木材を粉砕加工した木粉（もくかん）の活用です。これまで活用されていなかった端材や未利用材を加工した水分や粒度が安定した木粉は、化石燃料の代替材料や木の機能性を活かした新素材原料として

政 策

注目されています。

また、6次産業化により市場ニーズの把握が容易となったことから、無垢材についても、サーフボードやインテリアなど「新しい用途」が広がりました。

このように那賀町では、官民連携によって、「事業実施体制の構築」という地域課題を解決し、「新しい機能」「新しい用途」の製品づくりを行うことで、「森林資源の新しい出口を創る」ことに成功しております。

【事例Ⅰ】

茨城県境町

X

BOLDLY株式会社

「全国自治体初！自動運転バス定常運行『誰もが生活の足に困らない町』へ」

利根川と江戸川の分岐点に位置する茨城県境町は、バスの運行区間が町の中心部のみとなっていたため、郊外の移動は車を使わなければならず、高齢者の免許返納もままならないなど、厳しい状況でした。

町長は、そのような地域課題を解決するには、公共交通網への自動運転の導入が最も効果的だと判断し、自動運転の実証実験を行っていたB

OLDLY株式会社と自動運転バスの導入に向けて連携し、沿線住民への周知や関係構築に努め、令和2年11月26日に運行を開始しました。

また、令和3年2月には病院やスーパー等にバス停を追加、同年8月には土日の運行を開始するなど、矢継ぎ早に拡充することにより、令和4年7月19日には、乗車人数が1万人を突破し、住民の足として定着しています。

このように境町では、「バスの運行区間が限られている」「高齢者が免許を返納できない」という地域課題を官民連携による全国初の自動運転バス定常運行によって解決し、「誰もが生活の足に困らない町」づくりに成功しました。

官民連携への大きな第1歩を

行政へのニーズが多様化・複雑化しているなか、自治体内だけでは解

資料3

地方創生 SDGs 官民連携 プラットフォーム

まずは課題を登録しよう！

あなたの自治体が抱えるその“行政課題”

“地域だけでは解決が難しい課題(=困りごと)”

この問題、
どうにかしたいけど、
予算がない

この問題も手を付けたいけれど、
どうすればいいか
わからない

民間企業・団体の知見を聞いてみませんか？

まずは課題を登録して、官民連携への大きな第一歩を踏み出しましょう！

※企業版ふるさと納税の募集についても、“地域課題”として当プラットフォームに登録できます。

きますので、併せてご利用ください。本プラットフォームを多くの皆さまに使いこなしていただき、官民連携による地域課題解決を通じた持続可能なまちづくりに寄与できることを切に願っております。(資料3)

お問合せ先
内閣府 地方創生推進事務局
電話：03-55510-2175
メール：
g.SDGsplatform.h8a@cao.
go.jp
プラットフォームウェブサイト：
[https://future-city.go.jp/
platform/](https://future-city.go.jp/platform/)

◎町村週報ご購入のご案内◎
「町村週報」を毎号ご自宅や職場にお届けいたします。ご購入を希望される方は、はがき、FAXまたはEメール (kouhou@zok.or.jp) にて、全国町村会広報部までお申し込み下さい。
★年間購読料1,500円(送料込み)
★請求書を送付いたしますので、折り返しお振り込み下さい。

活 動



▲挨拶する角田次長

開会にあたり、全国町村会 角田 秀夫次長が主催者挨拶に立ち、上映会の参加者とトークセッションの登壇者等に対する謝辞を述べた後、「都市から山里をめざす若い人たちの活躍や、外から人が入ってくることに



▲挨拶する鈴木農文協プロダクション代表取締役

より地域が変わっていく様子がこの映画に描かれている」と映画を紹介。映画上映の後にトークセッションを実施することに触れ、「地域づくり、地方創生のヒントを得ていただきたい」と述べた。



全国町村会は10月17日、東京都内で、原村政樹監督のドキュメンタリー映画「若者は山里をめざす」上映会を開催した。本上映会は、全国町村会の「都市・農村共生社会創造シンポジウム事業」の一環として開催したもので、全国各地から町村関係者等50名が参加した。上映会では、同映画の上映に引き続き、原村政樹監督、出演者（西沙耶香氏、高野晃一氏）及び舞台となった埼玉県秩父郡東秩父村の足立理助村長によるトークセッションも実施した。

映画のあらすじ

*映画ホームページから引用

豊かな暮らしは、山里にあった。

自然を慈しみ、助け合いながら生きる、東秩父村に暮らす若者たちの3年を追ったドキュメンタリー

都心から僅か60km、バスと電車で80分、標高600メートルの山々が連なる山間に、東秩父村がある。「埼玉県の消滅可能性都市No.1」に指定されたこの村に、都会暮らしをやめ移り住む若者たちが増え始めた。村出身の西沙耶香さんは、コンビニもないこの村から出たいと高校卒業後上京。だが、ふるさとを消滅させたくない仕事をやめ村に戻ってきた。東京出身の高野晃一さんは、地域起こし協力隊に応募して採用された元銀行員。村の特産品であるノゴンボウに着目し村の特産品として開発を進め、地域に溶け込み移住を決意した。他にも和紙職人を目指す青年や芸大卒の女性、鬼太鼓座の若者たちも、村に住む戦前・戦後を生きた先輩たちと交流しながら生きる知恵を身につけていく。

続いて、映画制作のプロデューサーである株農文協プロダクション代表取締役 鈴木敏夫氏が挨拶に立ち、「武蔵野の山で暮らす人々の原点はどこにあるかという話を原村監督と頻繁にすることでこの映画を制作することとなった」と映画制作の経緯を説明。続いて、「地域の農業、農村、里山の暮らしの知恵というものを都会の人に積極的に伝えることが必要なのではないかという思いで雑誌『うかたま』を作ったが、この映画もそのような思いで作り、多くの方から賛同の意見をいただいた」としたうえで、最後に、「多くの人に映画を観ていただき、内容に共感して、次のステップに進む機会になる映画だと思っている」と述べた。



主催者挨拶、プロデューサー挨拶の後、ドキュメンタリー映画「若者は山里をめざす」が上映された。

活 動

トークセッション



映画上映後、原村政樹監督、西沙耶香氏、高野晃一氏及び足立理助村長によるトークセッションが行われた。進行は全国町村会 小野文明経 済農林部長が務めた。

映画を撮ったきっかけと一番訴えたかったこと(原村監督)

各地の村々を訪ね歩いていく中で、中山間地の荒廃、人がいなくなったり、山林もものすごく荒れてしまっている状況を見てきた。どうしたら

この村が輝きを戻せるのかを考えたときに、それは若い力なのではないかと思つた。若者たちが村で色々な苦勞をしながら頑張っている姿を見たいということ、村の人たちと外から来た人がつながり合いながら、若者たちは村の人から学び、村の人たちも若い人が来ることによつて生き活きとしてくる。そのような山里が持っている人と人との温かいつながりというものの価値を、これから日本を背負っていく世代の人たちにも知ってもらいたいということもある。

この村が輝きを戻せるのかを考えたときに、それは若い力なのではないかと思つた。若者たちが村で色々な苦勞をしながら頑張っている姿を見たいということ、村の人たちと外から来た人がつながり合いながら、若者たちは村の人から学び、村の人たちも若い人が来ることによつて生き活きとしてくる。そのような山里が持っている人と人との温かいつながりというものの価値を、これから日本を背負っていく世代の人たちにも知ってもらいたいということもある。

Uターン後の自身の変化(西氏)

村の人たちのすごく前向きな価値観に触れ、「何も無い」というものの捉え方が一番変わったのではないかな。

地域おこし協力隊着任後の自身の変化(高野氏)

村に住み、色々と関わる中で、物々交換のやりとりや自分が収穫した野菜を食べるといふ、お金ではないやりとりが人間らしい暮らしだと思ふようになった。そのような暮らしがあるということ、村の皆さんに教えていただいた。

この映画を観た感想(足立村長)

私が20歳のときに村に帰ってきて以来、考えたこと、感じたことが全てこの映画に描かれていた。本当に感動した。田園回帰が人間の真実だと思つている。

日本の山村の現状と田園回帰する若者が山村をめざす動機(原村監督)

若者が山村をめざすのは、今の社会が息苦しい、人間らしい暮らしがしたい、自分の力を伸ばすのはこの場所ではないか、そのように感じるからではないか。

山は山里の人たちのためだけにあっては、都会を含めた日本に暮らす全ての人たちにとって大切なものである。これから日本に生きていく若者たちのために、まず山を何とかしなければいけない。そのために、山里の大切さを伝えたいということ。都会にあまりにも人が多すぎるので、もう少し分散していくような流れができてほしいという気持ちである。

地域の方々はどのように変わってきたか(西氏・高野氏)

地域の方々の根っこにある部分は変わらないと思う。自虐ネタのように、「何も無いのよ。それがいいのよ」と言えるようになったら、色々な

東秩父村出身。25歳のときに東京での勤めを退職。地域おこし協力隊としてUターンで村に戻る。現在は、隣町の観光案内所や移住サポートセンターに勤務しながら、村の魅力を伝える活動を続けている。

▼西 沙耶香 氏



▲原村 政樹 氏

千葉県生まれ。「海女のリャンさん」で長編記録映画の製作を開始。以後「いのち耕す人々」、「無音の叫び声」、「武蔵野」、「お百姓さんになりたい」、「タネは誰のもの」、「食の安全を守る人々」など、農業をテーマに作品を発表。



20歳のときにUターンで東秩父村に戻る。村議会議員・議長を経て、平成24年9月、村長に就任。現在3期目。「田園回帰」という言葉が出てくる以前から「田園願望」という言葉に着目している。

▼足立 理助 氏



▲高野 晃一 氏

大学卒業後、都内の会社に就職。地域おこし協力隊に採用され東秩父村に移住した。伝統的な食文化を継承すること、東京の地域活性化に関連の会社で学びながら、東秩父村との二拠点生活を送る。



活 動



▲進行する小野経済農林部長

なことがあったのではないか。今ではすごく堂々とされているところがいいなと思っている。その物事を表面的なものだけではなく、どのように捉えるか、目の前にあることからいかに想像できるかということを地域の人たちから学んだ。

(西氏)

私ははじめ、村の名所や名物を作りたいと、すごくガツガツしていた部分があった。村の人と関わる中で、すぐにそれは間違っていたと気が付いた。村には何もないのでなく、たくさんの方の生活の知恵を使って生きてきた人がいて、それが東秩父村の魅力だと感じた。それ以来、そのことを心に留めて活動するようになった。私が最初に村に来たとき、村人はすごく警戒していたと思うが、そのようなこともあり、だんだんと協力してくれるようになった。

(高野氏)

村の中で起きている変化(足立村長)

最近、よそから若い人たちが引越してきて、お店を開いたりしている。この映画を通じて、様々な角度から村のよさを引き出していただいた。

地域おこし協力隊をうまく受け入れるポイント(西氏・高野氏・原村監督)

どの地域でも大変なことはあると思う。まずは同じ目線で等身大で地域を見たときに、どのような人たちがいて、どのような考え方でということと自分の先入観なしにしっかりと受け止め、受け入れることが大事なのではないか。一方、地域おこし協力隊の事業に関わっている方には、人の人生を扱う事業なのだということを心に留めていただけたら有り難い。

(西氏)

魅力というものは元々地域に眠っているものだと思う。それを引き出してこそ地域おこし協力隊なのではないか。

(高野氏)

もちろんその人の資質にもよるし、必ずしも全てがうまくいくわけではない。ただ、受け入れ側、行政の問題が非常に大きいと思う。折角若い人が来たのだから、その人がやることを応援してあげることが大事だと思う。

(原村監督)

これからのような生き方をしたいか(西氏・高野氏)

村のおばあちゃんたちのように、いくつになってもキラキラした笑顔でいたいし、誰かのチャレンジを勇気づけられるような人でありたい。

(西氏)

便利になっていく世界は少し怖いと村に居て感じるようになった。今でも昔ながらの暮らしをしている方は東秩父村に多くいるので、利便性、効率重視、お金重視のよなものにとらわれずに、私も将来的には、村で今の時代に合った人間らしい暮らしをしたい。

(高野氏)

原村監督から自主上映会のご案内

この映画の映画館での上映は終わりましたので、これからは地域の公民館等での自主上映会を広がっていただきたいと思います。そして、上映会を開催する際には、映画を観た後に、それぞれの地域で頑張っている若い人たちに由来するシンポジウムのようなものを併せて開催していただきたいと思っています。この映画のホームページに自主上映会の開催方法や予算等も記載していますので、一度ご覧になっていただけたら有難いです。

ドキュメンタリー映画「若者は山里をめざす」ホームページ
<https://wakamono-yamazato.com/>



お問合せ先
全国町村会 経済農林部
電話・03-3588-1104
メール・keinou@zck.or.jp



▲「美しい神津島の星空を子や孫の代まで残すこと」を目的とし、始まった取組により、東京都で初めて「星空保護区」に認定された

東京都 神津島村

この星空や自然・文化を 「次世代に伝える」

—— 星空保護区とエコツーリズム ——
保護しながら観光資源として活用する取組

1. 神津島村の概要

「神津集り給いて詮議有りし島なれば神集島と名付け給えり」伊豆諸島創世を伝える三宅記にはこのように記されており、この「神集島」が神津島の名の由来とされています。

地理は、東京から178km、伊豆諸島のほぼ中央に位置し、面積18.58km²、周囲22kmで、村落は島の西側に集中する一島一村の島です。

東京湾竹芝桟橋から大型船で約12時間、高速船で約3時間45分です。また、調布飛行場から航空便は45分でアクセスできます。

島の中央には、花の百名山並びに新日本百名山の一座に名を連ねる天上山



▲多幸湾と天上山。天上山の裾野に広がる海岸は島民憩いの場所



フォーラム



▲海水浴客で賑わう赤崎遊歩道



▲一本釣り漁という漁法で釣られる「キンメダイ」は絶品

をはじめ、宮塚山、高処山、秩父山が座し、急峻で平地が少ない地形となっています。

島の人口は、昭和30年代の約2、800人をピークに、昭和45年には2、081人と、激減しました。平成2年には2、466人まで回復しましたが、その後徐々に減少し、令和4年8月1日現在1、794人となり、近年では横ばいの状況となっています。

島の主な産業は、農業・漁業・観光業であり、農業の主な換金作物はアシタバ・レザーファン・パッションフルーツ等ですが、さらなる農業の活性化を目指して新規就農者の育成や支援を行うとともに、島に適した新たな換金作物を模索しています。

漁業は、東京諸島で最も盛んに操業されており、伊勢エビ・海草類・赤イカ・金目鯛等、多種の漁獲物が市場に出荷されています。

観光業は、近年では4万人ほどの来島者数で推移しており、主な観光資源として、天上山や後述する星空、白い砂浜と透明度の高い海等があります。その中でも、一番人気は海を目的とした観光であり、来島者数の約半数がマリンスポーツの盛んになる夏季に集中しています。

2. 昭和40年代のオーバーツーリズムと夏季観光への依存

神津島の観光業は、昭和40年代の離

島ブームにより急激に伸び、島の経済・生活環境に大きな変化をもたらしました。最盛期には年間10万人の来島者数に集中していました。この頃は夏になると島内いたるところで人があふれ、宿に入りきらぬ客もあるほどでした。当時はそのような概念がなかったかもしれないですが、まさにオーバーツーリズムという言葉が相応しい状況でした。その後、全国での観光地化、さらには激安海外ツアー等の普及により、来島者は減少、前記したように近年では4・5万人ほどの来島者数で推移しています。月別来島者数をみると、7月から9月にかけて半数以上の方が来島しており、夏季の観光に大きく依存している現状は変わりません。

オーバーツーリズムが問題視される昨今、神津島における夏季来島者の受入状況は飽和状態に近く、来島者を増加させるためには、観光のあり方を改めて考える得なくなりました。

3. 新たな観光資源としての「星空保護区」

星空保護区とは、米国アリゾナ州に本部を有するNPO団体である国際ダークスカイ協会(IDA)が認定する光害の影響のない、暗く美しい夜空を保護・保存するための優れた取組をたたえる「ダークスカイプレイス・プログラム」の和名で、この認定地を総

称したものを星空保護区と言います。令和5年9月現在、国内では4地域が認定されています。

神津島では、平成29年より、NPO法人神津島観光協会が周年をとおして活用できる満天の星を「神津島まるごとプラネタリウム」と銘打ち、星空方イド養成や星空観測会・星空観測ツアー等の事業に積極的に取り組んでいくこともあり、この認定に取り組むことになりました。

令和元年9月、IDA関係者の方にご来島いただき、島内関係者向けに説明会を開催しました。そこで「美しい神津島の星空を子や孫の代まで残すこと」を目的とし、保護区認定を目指すこととなり、東京都が推進する東京宝



▲「神津島星空ガイド養成講座」は島民をはじめ14名が受講した

フォーラム

島事業のサポートを受けながら動き出しました。

令和元年12月には、美しい星空を保護することを目的とし、「神津島星空公園条例」及び「神津島村の美しい星空を守る光害(ひかりがい)防止条例」を制定し、翌年1月より施行しました。

並行して、住民説明会を開催したのですが、星空保護区の認定を受けるには道路灯・防犯灯の形状・色温度がIDAの基準※をクリアするものに交換する必要があります。暗くなって安全性が保てないのではないかとという不安の声が多く聞きました。

根気よく、説明を続け、理解をいただくことができました。

実際、道路灯・防犯灯交換後に、数か所、暗くなったとのご意見をいただきましたが、その場所に灯具を追加することで対応し、安全性を保つことができます。



▲光害を防止し、美しい星空を保護するため、道路灯・防犯灯の交換工事を実施。民間企業と協力し、灯具開発から行った

道路灯・防犯灯を交換するにあたり、大きな壁が立ちました。当時はIDAに基準合致する灯具がなく、その入手に頭を悩ませましたが、岩崎電気株式会社との協力により特注の道路灯・防犯灯を開発していただけることになり、令和2年4月より交換工事に着手することができました。同年7月には島内2/3の交換が完了し、8月にIDAに星空保護区への申請書を提出しました。そして12月1日星空保護区ダークスカイ・アイランドとして正式認定をいただきました。その後も星空ガイドの育成や星空観測会・星空観測ツアーを継続するとともに、地域住民への啓発活動として、講演会や特別事業を開催し、星空保護区の意味について理解を深めています。

星空は季節ごとにその姿を変え、見る者を楽しませてくれます。特に神津島の観光閑散期である冬季は空気が澄み渡り、星空観測に最適な季節を迎えるため、通年の観光資源として最適です。

実際、観光業に携わる方々に話を聞くと、星空保護区認定後から、星空を目的にご来島くたさる方が増えたと伺いました。星空保護区認定がコロナ禍であったため、数字での比較ができませんが、星空保護区認定を目指したこの取組は、一定の成果を上げられていると感じ嬉しく思います。

今後も、星空保護区について積極的



▲村・観光産業界・地域住民の努力が実り、令和2年12月に星空保護区ダークスカイ・アイランドとして正式認定を受けた(右)
▲島民ガイドが行う星空観察ツアー(左)



フォーラム

にPRを実施すべく、イベント等での周知を図るとともに、他の認定地域と連携も図っています。

※上方光束0%、色温度3,000K以下

4. 自然環境や歴史文化を守り伝える「エコツーリズム」

神津島では多様な自然環境と地域資源を活かした観光振興と環境保全活動に取り組み、神津島の豊かな自然と文化・伝統を次世代に引き継ぐエコツーリズムを推進することを目的に令和3年から神津島エコツーリズム推進協議会を立ち上げ、「神津島エコツーリズム推進全体構想」を作成しました。令和5年、この全体構想を主務大臣(環境、国土交通、農林水産、文部科学)へ提出し、9月1日に認定を受けることができました。

神津島には天上山や海・星空等の自然観光資源と、漁師町の営みが色濃く残る歴史文化など、とても魅力的な観光資源がありますが、これまではマリニレジャーに頼っていた側面があります。今後は、この全体構想に基づき、自然を見せる観光から、自然を守る観光へシフトチェンジし、通年の観光資源として活用することを検討しています。

具体的には、天上山のさらなるPRや、村内の史跡等を巡るツアーの充実を検討しています。そのためには、第1にツアーガイドの育成が重要です。本村では、すでに、星空ガイドの育成



▲今後はエコツーリズムにも注力し、島の自然環境や歴史文化を次世代に引き継ぐことを目指している



▲島内の神社で催される無形民俗文化財「神津島のかつお釣り行事」の様子。漁師の若衆が鯉の一本釣りの所作を演じてその年の豊漁を祈願する

実績があることから、このノウハウを活かしガイド養成を実施していきます。さらに、講演会や特別授業等を開催し学習する機会を設けて、特に児童生徒にエコツーリズムの概念を学んでいただき、それを根付かせることで、さらにエコツーリズムが浸透していくことを目標としています。それが、自然を守り次世代につなげることでありと考えます。

また、観光振興の観点では、この取組によって、通年観光が成立し、多くのツアーガイドなど、観光事業者が専業で生計を立て暮らすことが最終目標です。

5. その他特色のある取組「離島留学制度」

都立神津高校は昭和47年に60名の入学生を迎え開設されました。少子高齢化や生活環境・教育環境の変化等により島内高校への入学希望者は激減し、全校生徒30名ほどまでに減少したため、後々の神津高校の存続が危ぶまれるようになりました。このため神津島村では、平成25年離島振興法の見直しに絡めて、平成24年の神津島村離島振興計画素案に「離島留学制度」を盛り込み、平成27年度より民家にホームステイという形で、男子生徒1名の留学生受け入れを開始しました。

現在は男子寮・女子寮とも完備され、男子7名、女子6名が留学し、高校全

体の生徒数は46名となっています。

離島留学希望者は年々増加し、昨年は22名の面接を行い男子3名、女子2名の受入をしました。

離島留学制度の導入により、神津島高校全体が活発になるとともに、全体の学力も目に見えてレベルアップしてきています。今後も神津島を担う有望な人材育成のため支援の継続・充実を図っていきます。

6. 最後に

私たちがこれまでに経験したことのない社会状況の中、全国的に少子高齢化と人口減少が問題となっています。本村も例外ではなく、令和12年には人口1,527人になると推計*されています。人口規模の縮小が予想される中においても、神津島で暮らすことで、私たち一人ひとりが心も身体も健康で豊かに日々を送れるよう、神津島村第5次総合計画では「誰もが健やかで、生き生きと活力のある島づくり」という目標を掲げています。

これを実現するためにも、星空保護区やエコツーリズムの取組を通して、観光産業の活性化を図り、さらにインフラ整備や社会福祉、防災、教育の充実等に取り組んでまいります。

※国立社会保障・人口問題研究所

東京都神津島村長 前田 弘



社会構造変革下における地方財政を考えるフォーラムシリーズ(第6回)

JFM×GRIPS PROJECT SPECIAL FORUM vol.6

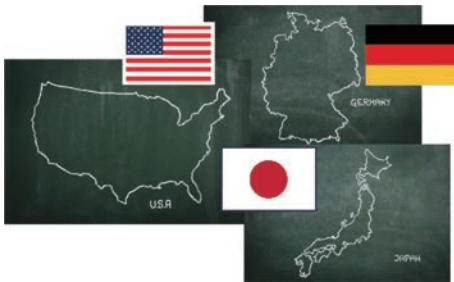
現地調査から見た 米国ニューヨーク州・ドイツの教育・人づくりと地方財政 —「国」十色、現場に立つ地方自治—

日時 2024年1月15日(月) 13:30-15:30

会場 GRIPS×Zoom

地方公共団体金融機構(JFM)と政策研究大学院大学(GRIPS)は2021年、人口減少等社会構造変革下における地方財政に関する調査研究・教育プロジェクトを立ち上げました。研究テーマの第一に、地方財政が密接に関わり公共性の高い教育・人づくり分野を取り上げ、欧米との国際比較研究から今後の地方のあり方を考えていきます。

第6回フォーラムでは、前回に引き続いて、米国ニューヨーク州とドイツでの現地調査を通じて明らかになった、両国の教育・人づくりと地方自治体の役割、そして地方財政の現状について紹介します。二つの国の事例から、社会構造変革下にある日本へどのような示唆を引き出すことができるのでしょうか。これからの日本の人づくりや地方財政について、考えていきたい長期的・構造的視点について議論します。



プログラム

1 開会・挨拶(13:30~)

政策研究大学院大学(GRIPS)副学長・教授・地域政策コースディレクター 高田 寛文氏
地方公共団体金融機構(JFM) 理事 川窪 俊広氏

2 発表(13:40~)

「米国ニューヨーク州における学校区財政の苦悩—現地調査を踏まえて—」

関口 智氏

「人づくりする人をつくる：ドイツの苦境から学ぶ」

佐藤 一光氏

3 意見交換・質疑(15:10~)

4 閉会(司会：GRIPS教授 羽白 淳)

※発表テーマ等は変更の可能性があります。

※対面会場は政策研究大学院大学(港区六本木7-22-1)・オンライン会場はZoomで、定員を超える対面会場希望は、オンライン参加となります。

スピーカー

関口
智立教大学
経済学部
教授佐藤
一光東京経済大学
経済学部
准教授

立教大学経済学部専任講師、准教授、米国カリフォルニア大学サンタバーバラ校客員研究員などを経て、2014年4月より現職。総務省地方財政審議会特別委員等を歴任。主著に、『現代アメリカ連邦税制—付加価値税なき国家の租税構造』(単著、東京大学出版会)、『地方財政・公会計制度の国際比較』(編著、日本経済評論社)等。

慶應義塾大学経済学部助教、内閣府計量分析室、若手大学人文社会科学部准教授を経て、2021年4月より現職。主著に、『環境税の日独比較：財政学から見た租税構造と導入過程』(単著、慶應義塾大学出版会)、『現代貨幣理論の構造と租税論・予算論からの検討』『財政研究』第16巻、他。

日時 2024年1月15日(月) 13:30-15:30

スピーカー 関口 智氏・佐藤 一光氏(JFM×GRIPS連携プロジェクト「人口減少時代等社会構造変革下における地方財政に関する調査研究会」副委員長・委員)

対象 地方行財政・教育関係研究者、地方自治体職員 等

会場 【ハイブリッド】GRIPS(東京都港区)(対面)&Zoom(オンライン)

参加費 無料/言語：日本語

申込 右記QRコードの申込フォームから申込
(https://grips-ac-jp.zoom.us/webinar/register/WN_REGC_zRkTtGsDLAr4xUDA)

問合せ local-governance@grips.ac.jp(事務局)



主催

JFM×GRIPS連携プロジェクト(事務局 政策研究大学院大学)
副学長・教授・地域政策コースディレクター 高田 寛文プロジェクトHP：<https://gripslocalgovernance.institute/>

随 想

岐阜県八百津町は、長野県から愛知県伊勢湾に注ぐ大河「木曾川」の中間点、岐阜県東部の山間部に位置しています。

第2次世界大戦中、ナチス・ドイツの迫害から逃れてきたユダヤ避難民等に対して、国の意に反して日本の通過ビザを発給し、数千人もの尊い命を救った元外交官・杉原千畝氏の出身地であります。この功績を後世に伝えるため、2000年、町に「杉原千畝記念館」を開館し、世界へ平和を発信しています。

から私に向かつて「おおつ金子か。もうアウトや」とおっしゃいました。細くなった先生の足をさすっていますと、先生はにこっと笑みを浮かべられて、「お前いくつになつた。毎日の練習思いつくすなあく。きつい練習に耐えたお前だから、これからの人生必ずしつかりと生きていけるぞ。頑張れや」小さな声で囁かれました。私は熱いものがこみ上げてくるのを覚え、病室を後にしました。その3日後、先生は亡くなりました。

た。そんな日本の落としもの、人々の忘れものを拾ってあげたい。そうすることで役者人生を削っていききたい。削ることを問い詰めていきたい。表現を削り、自分を削りながら風と波に漂う人生を続けたいと思う。世間の人がそれを見て『あ、何かこそばゆいな』って感じてくれる。そんな存在でありたい。」また、仕事で海外にもよく出掛けられ、「貧しくてもおらかな東南アジアの人々の姿や澄んだ目は人の痛みや輝き、優しさが経済成長とは関係のないことを教えてくれる」と言われました。



3人の恩人

岐阜県町村会長・八百津町長

金子政則

誇る、日本一のバンジージャンプがあります。秋には町内産の栗を使った和菓子「栗きんとん」が名物で、例年9月からの新栗解禁時期には県内外から多くの方が訪れています。

さて、私の人生における3人の恩人をご紹介します。

1人目は、牧野祐平先生(高校時代の野球部監督)です。

私の高校時代の恩師、野球部監督が病で入院中の病院にお見舞いに伺った時のことです。先生はベッド

る力、考える力、勇気は、人生において忘れることができないものであり、先生には「感謝」の想いで一杯です。

邦衛さんが、にこっと笑って温かい手の中で、私たちが忘れたものを拾って温め、「こんなもんが落ちてくるよ」と放り投げてくれるような声が今でも聞こえてきます。

2人目は、田中邦衛さん(俳優)です。

こんな感動的なお話を幾度となくお聴きするたびに、真っ直ぐな人柄が多くの人に愛されたのだらうと思いきり起しています。

今は亡き田中邦衛さんは、ドラマ『北の国から』で愚直な父親役を演じられた俳優です。

3人目は、田中澄江先生(劇作家)です。

ある時、こんなお話をしてくださりました。「日本は成長に何を求めてきたんだらう。その陰でいろんなものがこぼれ落ちてしまい、子どもたちの目から輝きが失われてしまっ

花の百名山の著者、田中澄江先生とは、笠ヶ岳、恵那山などを一緒に

登り、花を学び、歴史を学び、人生を学びました。数年前のことですが、出版社から一冊の本が届きました。その本の題名は『夫の始末』。本の内容は、絹という名の主人公が60余年の結婚生活の中で夫という男性にどう対処してきたかという女の軌跡が鮮やかに描かれていました。先生は、60数年連れ添って90歳で亡くなられた夫の劇作家・田中千禾夫先生の遺影が花と共に飾られている部屋で、私に向かつて机を叩きながら、「こうしてここを叩いて、『冗談じゃないわよ、さっさと先に逝っちゃって、まだ成仏させてやらないから、安らかに眠りなさいなんて言っちゃらないよ。お化けになつて出てらっしゃい。』といつも言ってるの。」そして、「次の山のお話、高い山は登り尽くしたし、これからは低い山に出掛けたいわね。歳を取つたらどんどん登らなくては駄目。そうしないと筋肉が硬くなつちゃうの」とおっしゃいました。

その年の夏も先生と佐久の天狗山に登り健気で美しい山に咲く花に出会うことができました。

戯曲や小説など幅広い執筆活動で知られる劇作家の田中澄江先生の葬儀ミサ・告別式は、東京力テ、ドラム聖マリア大聖堂で盛大に行われました。

かつて、澄江先生はおっしゃいました。「私は熟年という言葉は使わない。人間はいつも熟しているものだから。ポトンと地に落ちる時は本

当に熟した時。花も枯れば落ちる時が死ぬ時だから。」

私の心。人生の師でもあった巨星が落ちた。